

# 昭和三十一年における国語学界の展望

## 国語教育

望月久貴

### I 系統学習と学習指導要領

教育は眼前の学習者を対象として行われる。だから、学習者などのような実態をもっているか、それを見きわめることは、指導の源泉を手に入れることとなるから、指導に先だつ実態調査の意義は、その意味で大きいのである。昭和三十一年九月、文部省は国語と数学に関する全国学力調査を実施し、その報告書がこの年の五月に公刊された。そもそもこの調査のためには、学者や実際家を広く集めて、慎重に準備が進められたと聞いているから、調査の結果についてはかなりの信頼がもたれる。調査内容は、語彙、文章表現（漢字・かなづかい・文法）および読解にわたっている。全国の学校平均点は四二・一点であり、かなづかいと文法がよくて読解が悪く、読解の中では物語文の読解が比較的よろしく

て、説明文や随筆が非常に悪かった。つまり、読解の成績は、大體予想通りであったというが、それにしても、国語教育の中心的な領域と考えてきたものだけに、もう少しよい成績が期待されていたことであろう。同時に、読みといえは物語などを手にして、他の表現形態に力を注ぐことが少なかった点に気づくこともあったのである。

こうして、表現形態に即した読解研究が盛んになる糸口が一つふえたのであった。東京都青年国語研究会（倉沢栄吉・佐々木定夫等）は、研究授業をやつて講師に講評をさせ、それにもとづいて会員が討議するという研究方式をとり、四月に説明文、七月に物語文、十二月に詩の学習指導を公刊した（東洋館）。なお、年を越して劇の脚本にまで及んでいるが、真剣なよい業績だといえよう。

学習指導の研究が次第に深まるにしたがつて、指導に系統がなければならぬという考え方がこころ、二年來きざしていた。それは学力低下の警告にもとづいて、単元学習という指導形態の反省に至り、学力低下は方法論の根本的な欠陥のためではなく、実践方式の改善こそが必要であることに気づいた。その結果、単元学習に系統的な学習が必要であるという問題が提起されたのである。この間の消息を知らず、結果だけ聞かされた者の中には、単元学習を否定して系統学習に乗替えるのだと受取ったりもした。事実、そのような報道を掲げた新聞もあったほどである。

系統学習が、はつきりと登場したのは文部省主催の小学校教育指導講座国語班の研究主題「国語の系統的指導」からであった。これは全国を東・中・西の三部に分け、七・八・九の三月にわた

って開催された。それと呼応して七月には東京都国語教育協議会、八月には実践国語の会、九月には全日本国語教育協議会などの中心議題に系統学習が採択されたのである。これらの研究協議会においては、経験学習と系統学習との関係位置から出発して、聞く、話す、読む、書くの四領域、文法、語彙などの分野における系統試案が提示されたりしたが、いずれも未完成のものであったことは、当時としてはやむを得ない次第であった。日本国語教育学会（会長西尾吏）でもこれに関する座談会を催して機関誌に掲げ、さらに研究集録を「国語の系統学習」（東洋館）の一冊にまとめて十二月に刊行している。

折しも学習指導要領の改訂が進行中であった。この前年に発足した改訂のための教材等調査研究会は、目標の設定を中心主題として、さらに系統的の学習指導のあり方を探究することとなったのである。知識を教授してすむ教科ではない国語科で、その学習指導の系統を設定する仕事は決して容易なものではない。——ということが、研究会や学会の研究物からもうかがえたのであったから、それを指導要領の中にどのようにとり込むかは大きな問題であったと思われる。この年には道德教育、算数、理科等に対する基本方針が教育課程審議会により提示されており、国語では中学校に対して「学習指導の目標や内容や教材等を精選し、文章の読解力、作文や書写の表現力を重視する」旨が協議されていることが聞こえ、また論議の対象になっていた毛筆習字が従前通り国語科の中に含まれる旨もほぼ決定していたようである。（正しくは翌三三年三月に答申されている。）指導要領の改訂については、文部省からも各方面に意見を徴しているが、日本国語教育学会あ

たりでも、国語科授業時間数の増加要望やその根拠となる国語科指導内容案の作成などを公表し、また、指導要領改訂に関する要望や意見をまとめたりしていたのであった。

## Ⅱ 国語教育と道德教育

前記した文部省主催の小学校教育指導者講座に道德教育班が設定されたことは、深い意味があったようである。それまであらゆる教科が分担していたはずの道德教育に対する取扱いが、急に一般科並にせりあがったわけである。これまでも道德教育に関する事項は、指導要領にいわば申訳的に記載されており、したがってそれに対する研究も多少はあったのであるが、現場における実践ははかばかしからず、効果ははっきりと現われなかった。これがいけなかったのである。反対者は修身科の復活ということも論拠の一点に数えているが、そんなに反対だったのなら、もう少し身を入れて道德教育をして来ればよかったのだという考え方も聞かえている。前記講座の研究内容は、社会科における道德的指導内容の研究と、道德的情操の涵養に役立つ読み物の研究で、その後者が国語科と関連するものであった。それが国語科において学習指導されるとき、道德教育的の配慮——そんなものはいらないという説もある——のもとに実践されたかどうか、疑問視される面はなかったであろうか。時間特設ということで注視されるようになった翌三三年あたりになって、始めて国語科における道德教育の位置が次第に一般に認識されるに至ったのであるから、逆説的な言い方をすれば、文部省はそのうちに「特設」を停止してもよいではないかとさえ思われる。いずれにせよ、時間特設（決定は三

三年三月)の呼び声にうながされて、教科における道徳教育への関心が高まったように受け取れる。国語教育は言語を指導する教科であるから、人間形成の重要な面を負っており、したがって道徳教育を結果するのであるという論は、論としてはいいが、現場でそれを繰返していても、ちががかない。その意味で満足すべき「国語教育における道徳教育」指導大系は、この年のうちに見ることはできなかつたのである。この年に現われた考え方として、警戒しなればならないことは、文部省でもそうであるが、すぐに文学作品による道徳教育に走ってしまった、その他の面、言語指導における道徳教育を軽視することである。文学による人間形成は早くから着眼されているところであるが、言語指導の研究歴が浅いだけに、この方面における人間形成の理念は、これから組立てられていかなければならないのである。

### Ⅲ 読書研究

読解力の低下、道徳教育への関心などに呼応して、読書指導の面が活発化されてきた。これは図書館教育における図書館づくりが目鼻がついたので、棚に並んだ書物をどう読ませるかという画竜点睛にまで進んだという見方もできる。元来読書は国語教育における読解指導の発展とみられていたのであるが、この読解と読書をもっと近接せしめる必要があるという動きがぎざぎざしてきた。経験主義の読みに徹すれば、そこまでいくのが当然である。そして、そうした理論も、ぼつぼつ現われてきたようである。

そのために、読書そのものをもっと探求しようという動きが出て、たとえば日本読書学会の研究活動などが注目されるに至って

いる。この学会(会長石山脩平)は、教育学・心理学・生理学・社会学などの学徒とともに、国語教育学が歩調を揃えようとしており、そこに読書の科学的・総合的研究という特色がうかがわれる。機関誌として「読書科学」を季刊で出している。一月一日・二日には第一回研究大会を東京教育大学で開催し、研究主題に「人間形成をめざす読書指導の実践」を掲げ、読書指導による生活指導の実践、文学教育、児童青年の読み物の基準、問題児の読書による治療的指導、読書に関する基礎的研究などの諸分科会を設けて充実した二日間であった。後に「読書による人格形成」として一冊にまとめた(牧書店)のであるが、この成果は国語教育における読書指導にも寄与するものであった。

### Ⅳ 学習指導の動向

小中教材の関連的研究は、従来から行われてきたのであるが、中高のそれは、むしろ円滑に接続しないのを当然とする考え方が行われている。前者は義務教育であり、後者は選抜された者の教育である。前者は国民普通教育であり、後者は高等教育で大学の前期教育でもあるというのであろうが、それでは六三三制に講ができることになる。だから、小中学学習指導要領の改訂が成ったあかつきには、やはり高校の改訂して円滑に関連するようにしなければならぬと思われる。特に高校の教材に中学校とのギャップが感じられるようである。そして、高校の教材研究といえは、教材の国語学的(文法学的)、国文学的解明で終止する傾向が強い。古典の場合になると、品詞分解で十中八、九が過ごされることもあるという。いずれも大学入試に原因するといわれるのである

るが、それならば大学側の出題でこれを矯正するという必要も起さるであらう。もつとも高大間の談合をしている県もあると聞いているが、現在としてはそれもほしくらいのものである。それで、国文学関係の雑誌でこの要求を満たすべく、教材研究欄を特設するものが多いのであるが、これがもう一歩前進して、文字通りの教材の研究になることが望ましいのである。なお、生徒のためのNHK高等学校講座は、毎週火・金、月・木などの夜間に鳥山榛名、増淵恒吉の両氏によって行われており、多大の聴取者をもっているといわれる。

小中高を通じて、学習指導の研究は、いわゆる曲り角に來たという国語教育意識のもとに、いよいよ盛んになっている。全国で催される研究会は小さな規模のものまで数えれば年々増加する傾向を示し、研究団体も数日宿泊して研究するという真剣さのあふれたものも少なくないようである。

本年度の学習指導の動向は、月刊・季刊の雑誌、単行本、講座類で本年に出たものを通覧することになるのであるが、国語年鑑(国立国語研究所編)によれば、次のように概況がうかがえるのである。次の表は、国語教育関係雑誌論文の項目別題目数である。資料は現在刊行されている国語教育関係の大小ほとんどの雑誌を網羅しているとみてよからう。論文は数とともに内容的にも検討しなければならぬことはいうまでもないが、ここでは数的にみることにする。

国語教育概説	四五	聞く・話すこと	五三
指導・学習の問題	九五	読むこと	一一〇
学力・評価	五五	書くこと	一四二

文字	三二	視聴覚教育	一三
文法	五三	新聞学習	六
文法教育	五三	特殊教育	二〇
古典教育	一三	幼児教育	一三
方言教育	一三	ローマ字教育	四〇

右の表をみると、書くことが一位、読むことが二位、指導・学習の問題が三位ということになり、読むことも、別に項目を立てている文学教育や古典教育を加えると、一七六と成って一位になる。

書くことの領域は、書くこと一般、作文教育一般、作文の指導、生活綴方、報告・記録文の指導、日記・手紙の指導、文集の指導等に分けられる。「作文教育」(責任者八木橋雄次郎)などという作文研究専門誌もあるほどであるから、題目数はおびただしいものになるはずである。「作文教育」には毎号特集されている記事がある。いわゆる生活文の指導もさることながら、報告・記録文等の実用的な文章の学習指導は、じみなものであるが、もう一段と研究する必要があるように思う。

読むことの領域は、読みの指導が多くの関心をひいている証拠に、題目数も多いのである。「言語生活」(国立国語研究所編)の五月号が朗読に関する特集をしていて、栗原一登・高藤武馬・小出正吾・伊達兼三郎・石森延男・黒田三郎の諸氏が執筆し、石井庄司・遠藤慎吾・内藤濯・西尾実の四氏の座談会を収めているのは、かなり読みごたえがあった。各教科書会社の小冊子の記事に読解指導が多いのは当然かも知れないが、短いながらもよい論文が散見する。読書指導の論文は次第にふえていくことが感じら

れるけれども、もっともって国語教育の中で賑やかに論じられてもいいのである。

それに引きかえて聞く、話すことの領域は、やや不振ではないかと思われる。「教育技術」(小学館)あたりが、よくこの記事を載せているが、話しことばの指導が国語教育界の中心をそれてきたように感ずるのは偏見であろうか。これまでの学習指導要領では聞くことと話すことの二領域を保有していたのに、改訂版では聞く・話すことと学習領域をまとめられているの気がかりになるし、それ自体が話しことばの指導の軽視を招くことにならないように祈らざるを得ない。話すことの指導では話し合いの指導に關する研究が目立ってきている。これは大切な面であるし、教科の教育の中にも話し合いの場が多いのであるし、いっそう研究される必要がある。

国語教育概説、指導・学習の問題としては、文部省や協議会で、この年の後半にとりあげられた系統学習が、石黒修(解釈と鑑賞十月号)・菱手重則(国語教室十月号)・花田哲幸(教育研究十一月号)等によって論じられた程度にとどまったのは、問題の困難性を物語っていると受取られるのである。道徳教育についても、時間特設の線が次第にはつきりしてきたためか、余りとりあげられていない。

文字の領域では、前年のかたかな・ひらがな先習論が、この年の前半にまで及んでいるのが注目される。高橋孝(実践国語二月号)・岡崎常太郎(教育心理四月号)・イチカワ、マサオ(カナノヒカリ六月号)等が論究している。

文法教育は文法ブームと呼ばれた前年度の連続で、題目の数が

かなり多い。その多くは文法指導の観点と方法を工夫し発表したものであるが、小学校なり中学校なりの文法教育の決定版を見るまでには至っていない。

文学教育・古典教育については、特に新しい問題提起はなかつたようである。

学力の面では、「文部時報」が全国学力調査問題別分析報告を六・七月に行っている。雑誌「教育技術」が小学校一年から六年まで、「各科基礎学力の体系」を四月号の別冊付録として出している。ローマ字教育は、一部の熱心な研究者ではあるが、よい実践記録がみられる。ローマ字教育は、もって程度を低くしても全般に浸潤させることが必要のように見られる。

ことしは国語教育関係の講座・叢書の当り年であった。その多くは本年中に完結しないまでも、続々と刊行されている。NHK国語講座(放送協会編)は、一月に「発声と発音」、六月に「統発声と発音」、七月に「文章とは何か」、八月に「私たちの国語」十月に「方言と文化」を出した。(宝文館)。講座・現代国語学(岩淵・林・大石・柴田編、筑摩書房)は十一月に「ことばの働き」、十二月に「ことばの体系」を出し、日本文法講座(明治書院編)は十月に「文法論と文法教育」、十一月に「総論」、十二月に「文法史」を出した。また奥水実は国語指守法大系(明治図書)を単独で編集し、「国語指導概説」・「読解指守法」・「鑑賞指守法」・「作文指守法」・「話し方・聞き方指守法」・「言語基礎学習指守法」の六巻を十一月に同時に発行している。その他、現代教科教育講座(梅根・勝田編、河出書房)は「言語教育」を第二巻

として、児童心理選書（金子書房）は「国語科の教育心理」を第九巻として出している。前者は奥水・石黒・海後・波多野、後者は阪本・望月・滑川・倉沢・平井・柳内等が執筆しているが、国語教育学と手を組んで、教育学心理学部門が協力している形態である。このように講座・叢書類が統刊されている現象は、戦後十年の国語教育の進展を回顧し、将来の指標を見いだそうとする動きであり、いわゆる曲り角に立った感を深くさせられる。

単行本としては、上甲幹一（「言語指導」朝倉書店）が話しことばの研究を出し、冲山光（「読解力向上の理論と実践」金沢書店）と飛田文雄（「読書指導」・牧書店）が読みの研究を出している。文法の面では、堀川勝太郎（「基本文型による読解指導」・明治図書）、石田佐久馬（「これからの小学校文法」・東洋館）、阪本・大久保・松山（「文法教育の実践」・春秋社）等が、いずれも現場の実践に即した研究をみせている。作文の面では、倉沢栄吉（「表現指導」・朝倉書店）、上田庄三郎（「抵抗する作文教育」・新光閣）、国分一太郎（「生活綴方ノート」・新評論）等が新しい研究を示した。なお、文部省からは「漢字の学習指導に関する研究」「教育漢字の学年配当——漢字学習指導実験調査報告」を公刊している。（明治図書・教育出版）——東京学芸大学助教——